

岐阜シンポジウム『岐阜県の野生動物 身近で多様な「隣人」たち』 会場とオンラインからの質問と回答

●講演『となりのホンドギツネ』への質問と回答 (回答者 渡邊智之)

- Q. 開けた場所はキツネも狙われやすそうだけれど、キツネが市街地で恐れている弱点や天敵は何ですか？
- A. 野犬にやられる事もあるようですが、市街地では今はほぼ見かけないので、目立った天敵はいません。市街地での一番の天敵は人だと思えます。子ギツネの活動が活発になる6月頃から車に轢かれることがよくあります。
- Q. 美濃加茂市だとどのあたりでキツネが見られますか？
- A. 木曽川沿いでも出会います。私も何度か出会っています。
- Q. キツネ、タヌキの子供をペットにしてもよいのですか、自宅の庭に来るのです。
- A. 日本の野生鳥獣をペットとして飼うことは法律で禁止されています。どんな暮らしをしているのか、そっと観察させてもらうぐらいがいいも思いますよ。
- Q. 犬用のビーフジャーキー等与えるのはよいのか、悪いのか。
- A. 与えれば食べると思いますが、直接的な餌付けは人慣れた個体を増やし、感染症の問題や交通事故などの軋轢を生む可能性があります。そうなると可愛いからと餌をあげたキツネが、逆に不幸なことに成りかねません。ですので直接的な餌付けはいけません。
- Q. 私がフィールドワークをするとき、よく林道でキツネを見かけます。こうしたキツネは山と草原を行き来しているのでしょうか？
- A. 仰る通り、林道を草地など別の場所への移動経路として使っているかもしれません。また、林道を狩り場として利用している可能性もあります。
- Q. 野生のキツネをみたことがないんですけど、具体的に長良川のどこらへんに生息していますか？
- A. 長良川沿いは至るところにいます。講演会でお話した狩り場や寝床になりそうな場所を探して、夕方から観察に行ってみてください。出会えるかも知れませんが、「自分がキツネだったらどこで暮らすか？」を想像して探るのが大切です。
- Q. 渡邊先生に質問です。ホンドギツネの外観による雌雄判別は何ですか？
- A. 犬と同じで、お尻やお腹が見えれば、雌なら乳首などが見えたり、雄ならペニスが見えたりすれば分かります。雌雄で性質の違いもあるように感じますが、それ以外で判断するのはとても難しいです。
- Q. キツネについて：キツネの個体識別をするうえで注目するとよいポイントがあれば教えていただけると嬉しいです。(形態・動き方など何でも嬉しいです。)
- A. 尻尾の先の白や黒の入り方や目つきなどの顔つきが違います。換毛期であれば抜き方も違います。ただし、外見だけでは難しいので、それ以外に人間に対してどういった反応をするのかなど、複合的な要素を照らし合わせて判断の方が確実です。
- Q. キツネについて：音声コミュニケーションの中で、求愛のさいは雄・雌どちらからもアプローチをするのでしょうか？
- A. 冬場に「コンコン」と鳴くのは雄しか聞いたことがありません。また、雌の上に前足を乗せたり、追いかけたりする行動は雄が多いので基本的には雄からアプローチするのではと思います。
- Q. 哺乳類について：ヌタ場やタヌキのためフン場を見つけるコツがありましたら教えていただけないでしょうか。
- A. 市街地だとタヌキのため糞場は橋の下によくあります。野外でも少し高台だったり、水はけの良い場所に多いように感じます。ヌタ場は逆に水場の近くに多い印象です。どちらも獣道を辿ると出会うことがあります。

●講演『岐阜県の哺乳類』への質問と回答 (回答者 森部絢嗣)

- Q. 家のネズミ捕りにかかったネズミほしいですか？
- A. はい。一度、moribe.junji.g0@f.gifu-u.ac.jpまでご連絡ください。
- Q. ロードキル個体を見つけた場合は行政に連絡すればよいのですか？
- A. はい。ロードキル発生地市の市町村へご連絡ください。
- Q. 哺乳類について：ロードキル個体は研究に利用する際に行政へ届け出などが必要なのでしょうか？(送るのに)然るべき研究機関“がどこかわからない際は”どう探したらよいでしょうか？
- A. 不要です。「送るのに然るべき研究機関」がわからなければ、moribe.junji.g0@f.gifu-u.ac.jpまでご連絡ください。
- Q. 岐阜県にモグラの分布境界があるのはなぜですか。どうして岐阜県が境になるのか。
- A. 西から分布を広げてきたコウベモグラの最前線が“現在”ではちょうど岐阜県を含む中部地方に位置します。今後、時間が経てばこの分布境界線は西側へ移行していくと予想されますが、相応の時間がかかると思います。
- Q. ジネズミのところで、遺伝的に違うものを種として分けないのはなぜか。(～亜種みたいに)
- A. 種の定義は一般的には「生殖的隔離が起きているもの」としています。この定義自体に従うことも難しいのですが、単にミトコンドリアDNAによる系統が分かれるからといって、別種にすることはありません。類縁他種との分化の程度も考慮します。今後さらに東西の違いについて明確な要素が発見されれば、種レベルまたは亜種レベルとして分けられる可能性はあります。

Q. シカなどの動物が町に来てしまうのは森林開発など人による自然への介入が原因だと以前聞いたことがありますが、岐阜でのシカやイノシシの出現もそのようなことが原因なのでしょうが？

A. 近年では新たな森林開発は少ない状態です。現在、街への出没は個体数が増加し、生息域を拡大していることが原因考えられています。

Q. ホンドギツネについてですが、近年、畑や庭などの有害駆除のためのワナにかかり、処分される事例が増えていますが。アライグマやヌートリアは仕方ないと思うのですが、ホンドギツネやニホンアナグマ、ホンドタヌキなどができるだけ処分されないようにするには、どのような方法が考えられますでしょうか？

A. まず前提として、上記の動物を許可なく捕獲することは違法です。また目的としない（捕獲許可がない）捕獲であれば、それらを捕獲したことは錯誤捕獲となり、放獣する必要があります。シカなどの民にそれらの動物が捕獲されないようにするためには、罠が作動する感度を鈍くし、軽い体重では作動しないように工夫する必要があります。

●講演『岐阜県のコウモリ類』への質問と回答（回答者 山本輝正）

Q. コウモリの音声はどのように録音されているのでしょうか？

A. コウモリの発する（人に聞こえない）超音波を可聴音（人が聞こえる音）に変える機械としてBAT DETECTOR(バットディテクター：コウモリ探知機：以下BDとして書きます)があります。これには大きく2つの方式があります。すなわち、リアルタイムに超音波の周波数を変える方式（2万円～）と超音波を録音しその再生時間を延ばして可聴音に変える方式（15万円～）です。この後者の方式の音声を用いて解析をします。いろいろなBDがありますが、リアルタイムに音を録音してメモリーの保存できるBDが極めて重宝しますが、高額（25万円、70万円ほど）です。

Q. コウモリについて、コウモリの捕獲の仕方はどのようなものですか？写真にのっている腕についている金具の意味とは？

A. コウモリの捕獲には一般に「カスミ網」と「ハーブトラップ」を用います。カスミ網は2本の竿の間に張ることで設置をします。ただし、コウモリがカスミ網にかかって5分以上放置するとカスミ網を破って逃げってしまう場合があるので、その場に常駐することが必要となります。ただし現在は、カスミ網の捕獲許可なしで所持していること自体が違法となります。

ハーブトラップは、縦に張ったテグスの2本のラインと下にある袋からなる構造をしています。設置に時間がかかり、山中を運ぶには重く（15kg以上）、高価（25万円～）ですが、1～2時間程度なら放置ができるため、捕獲調査には、重宝します。腕についている金具の意味：一般にバンドと言いますステンレス製の腕輪に番号等が打ちこんであります。これはあまりコウモリの飛行に影響がないと考えられ、全世界の研究者に採用されているコウモリ用の標識です。これにより、日本でも20年以上の生存が確認されています。世界では、41年の生存が確認されたコウモリもいます。これぐらい持たせるためには、軽量で頑丈、安価であるバンドの専門業者のものが広く使われています。

Q. コウモリの接写の写真をどうやって撮っているのかを知りたいです。

A. 今は安価で性能のいいカメラ（NIKON P900など）がありますので、実際に接近しなくてもねぐらにいる状態でうまく取れる場合が多いです。

Q. コウモリは人間が聞こえる声で鳴くことはあるのか？

A. ヤマコウモリやオヒキコウモリは、20kHz以下の音声で鳴きますので、若い人は聞くことができますと思います。年を取ると聞こえなくなります。

Q. コウモリ探しのコツはなにかありますか？

A. 自然林の出来るだけ広く残った地域で、1年間を通じて捕獲調査を継続して実施する以外にありません。

Q. ウサギコウモリを見てみたいです。

A. 秘密の生息場所が何か所かありますが、コウモリ保護のために一般に公表することは無いので、まず一般には見られませんね。調査者に同行させてもらうしかありませんが、各地で開催されている「コウモリ観察会」に参加されると運がよければ見られるかもしれませんね。

Q. コウモリ類について：岐阜や長野県でコウモリの種が多いのは、山岳が多いなど地理的特徴によるものなのでしょうか？

A. 近隣県ですので、それぞれの地域での調査者の調査努力の違いだけであると思います。

Q. コウモリ類について：コウモリ分類(同定)がとても難しいということが印象に残ったのですが、色彩変異が少ないのは活動時間帯や生活史が夜に集中しているからでしょうか？

A. 活動時間が夜間で、ねぐらが洞窟や樹洞など暗い場所ですので、目立たないようにするため地味な色であると思われます。ただし世界には、バナナの葉の裏側などをねぐらとするコウモリでオレンジ色や白色の体色のコウモリが生息しています。

Q. コウモリ類について：異なる種のコウモリが同じ洞などに一緒にくらすことはあるのでしょうか？

A. 同じ洞窟内に異種のコウモリ類が生息していることは普通に見られます。異種のコウモリが混じって体を密接に着けた混群を形成する種もあります。

Q. コウモリ類について：キクガシラコウモリたちはなぜC F音のピークを東西の分布により変化させているのでしょうか？

A. なぜでしょう？それが分かれば面白いですね。

●講演『岐阜県の爬虫類：ニホンイシガメの危機と保全』への質問と回答（回答者 楠田哲士）

Q. 外来カメがこんなに増えていることをもっと一般の人たちに知らせては。

A. 今回のような一般向けのシンポジウムや講演会をはじめ、高校生むけの授業や動物園水族館のイベント、新聞・テレビ等の協力も得ながら様々な機会を見つけて発信に鋭意努力し続けています。しかし、まだまだ十分ではありませんので、何か機会があれば是非ご提案をお願いします。またSNS等で適切な情報の拡散にご協力をよろしくお願いします。外来種は、1匹1匹の発見情報と確実な捕獲が重要です。すでに拡大しきっているアカミミガメのようにならないように、アカミミガメ以外の種に対しては早期発見・早期対応が重要です。特に、カメ類は雌の生殖器官内に何年も精子を貯蔵する機能があることが知られているため、雌が1匹でも発見されれば、雄と出会わなくても（飼育下で交尾していれば）、有精卵を産む可能性があります。

Q. カミツキガメの子どもが畑にいることを農作業している人から通報を受けたということであったが、情報提供をあらかじめお願いしてあったのか？（一般の人からの情報は貴重だと思う）

A. お願いしていたわけではありませんが、テレビ等でこのカメのことはご存じだったとのこと。今回、発見者やその周囲の関係者が、岐阜市役所へ適切に通報いただけたことで、明らかになった例です。すばらしい対応でした。ご指摘の通り、一般の皆様が目や情報は大きな意味を持ちますので、今後もこういった場合の連絡先等の普及啓発を進めていきます。上述の質問の回答とも関連しますが、今回のカミツキガメ幼体の発見については、岐阜新聞に取り上げていただいた他、NHK岐阜に取材をお願いし、東海エリアのニュースとして放送されました。NHK岐阜NEWS WEB (<https://www3.nhk.or.jp/lnews/gifu/20221110/3080010099.html>) およびNHK東海NEWS WEB (<https://www3.nhk.or.jp/tokai-news/20221111/3000025872.html>) にも掲載されています。少しでも普及啓発のために情報発信をしていきたいと思っております。岐阜県庁、岐阜市役所、岐阜県警に情報が入った場合には、当研究室に連絡をいただく体制を構築しつつありますが、岐阜市以外の役所とも連絡体制を作ることが今後の課題です。あわせて、行政等からの発信もお願いしていきたいと思っております。

Q. カメの捕獲調査はどのような手法で行われるのでしょうか？

A. カニかごやもんどりに誘因餌を付けたもの、あるいは日光浴型のワナを使用した捕獲方法がカメでは一般的です。私たちがこれらの方法を使用しています。カニかごやもんどりを使う場合は、カメが入って窒息死しないように、息継ぎができるように工夫する必要があります。

Q. つかまえたカメの駆除方法はどのようなものですか？

A. 岐阜大学では、現状は実験動物（動物愛護管理法では哺乳類、鳥類、爬虫類が対象）と同様に扱うことになっており、カメに推奨されている安楽殺用の薬剤を投与した後、冷凍しています。この薬剤の取り扱いには厳しく規制されているため、一般には入手が難しく、全国各地で一般団体等が行っている活動では使用されていません。通常は、冷凍による安楽殺が行われています。現実的な活動としては冷凍処理によらざるを得ないと思われ、環境省も「-20℃以下での48時間以上の冷凍」を提案しています（環境省、2021、『アカミミガメ防除の手引き』）。ただし、低温による安楽殺は米国では原則認められていません。

Q. 駆除されたミシシippアカミミガメは有効活用(食用や堆肥化)はしましたか？

A. 駆除した後に発生する悩ましい課題として、処分という問題があります。これをマイナスからプラスへ転換させる試みとして、各地で食用や堆肥化等、いくつかの取り組みが検討され紹介されています。当研究室でも、安楽殺後の個体の処分は課題となっています（実験動物の屠体として専門業者に有料で処分を依頼しているため、莫大な経費がかかっています）。捕獲個体数が膨大であるため、一時的な試みとしては可能ですが、労力的に現実的な方法ではないため、新たな活用方法の提案も含め、地元企業や市民等との連携が必要と考えています。有効活用という面では、私たちはアカミミガメの増殖理由を調べ、野外での増殖抑制のためのヒントを得たいと考え、研究に使用しています。また二ホンイシガメ等の保全（保護増殖）に役立てることを目標に、日本での淡水生カメ類の繁殖生理を明らかにするために、アカミミガメを研究利用している意味もあります。

Q. 二ホンイシガメについて：基本的な質問で申し訳ないのですが、カメの分布と各水系のつながりには何か関連はないのでしょうか？

A. 二ホンイシガメは、岐阜県内では濃尾平野であれば、どの水系にも分布していますが、より北部（濃尾平野）に集中しています。以前は南部にも広く生息していたと思われませんが、環境悪化の影響の大きい南部から個体数を減らしていると思われまます。二ホンイシガメ自体は、全国的には遺伝的に異なる2つの集団があり、中国地方を境（広島県－島根県あたり）に、以東の本州と四国に分布するグループAと、以西の中国地方と九州に分布するグループBに分けられることが報告されています。岐阜県の個体は、グループAです。各地の水系ごとの遺伝的差異など、地域的な調査は行われていないため、岐阜県内での調査を進めています。

Q. 二ホンイシガメの前肢の欠損が多い理由が気になりました。

A. 四肢を欠損している個体では、二ホンイシガメに前肢欠損が多く、クサガメでは後肢欠損が多く、明らかな種差があります（詳細は文献1を参照）。この傾向は他の地域でも確認されています。この違いの理由は不明ですが、陸域における行動や、捕食者（おそらくアライグマ）に襲われた際の逃避反応などに種差があるのではないかと考えています。ただし、欠損部位によりその後の生存率に差が出る可能性も考えられ、欠損調査だけでは表面化しない野外での致死状況（野外での致死状況を明らかにすることは不可能に近い）も念頭に判断する必要があります。

Q. 二ホンイシガメについて：アライグマが二ホンイシガメをたべるのは、たまたまその様子が撮られたのか、明らかにアカミミガメより嗜好されているのか、どちらでしょうか。もし嗜好性がある場合、何が原因なのだと考えられるでしょうか？

A. アライグマがカメを食べているところを、目撃またはセンサーカメラ等で捉えたことはありません。アライグマの分布や出没状況などから可能性が高いと判断しています（岐阜県での捕食例は文献2と3を参照）。多くのカメ類は甲の中に四肢や尾を収納できる種が多く、それらを引きずり出して食べる器用さがあるのは、日本ではアライグマくらいだろうと考えられます。カラスは、カメの幼体であれば、中身をついばんで捕食することができます。アカミミガメ等に比べて二ホンイシガメが捕食されやすいのは、二ホンイシガメの生態に関連していると思われまます。二ホンイシガメは、アカミミガメやクサガメに比べて、陸上を利用することが多く、また冬場に比較的浅い場所で越冬している場合があり、アライグマに発見されやすいとも考えられます。アカミミガメは水棲傾向が強く、現地ではアライグマやワニ類、大型猛禽類などの捕食者がいるため、逃避能力を有していると思われまます。

Q. 楠田先生に伺いたのですが、二ホンイシガメの需要が多いのに養殖個体が主流にならないのはどんな要因が考えられるのでしょうか？

A. 養殖個体も流通していますが、それが主流にならない（それ以上に成体が捕獲されている）のはいくつかの理由があると思ひます。まず、アカミミガメやクサガメに比べて、産卵数が少ないことが挙げられます。また、二ホンイシガメの飼育、特に幼体の飼育は他のカメ種よりも難しく、真菌感染が非常によく発生し、死亡する例が多くあります。二ホンイシガメは幼体よりも、成体が（も）人気であるため、取引業者はより手軽な野外での捕獲、あるいはその買い取りのほうがりットが大きいのかも知れません。二ホンイシガメに対して、捕獲等は何ら規制されていないため、養殖へのシフトは各取引業者の考え次第です。保全側ではなく販売者側に養殖のメリットが大きくならなければ、容易には進まないと思ひます。

Q. 絶滅危惧種を守るために個人でできることはありますか？

A. 岐阜県内では、二ホンイシガメの危機はアカミミガメの増加だけでなく、むしろ生息環境の悪化、特にエコトーンの減少や交雑可能なクサガメの生息域拡大の影響が大きいように思ひます。環境改善やアカミミガメ防除といった直接的な活動を行っ

ている団体に協力する方法があります（文献4と5を参照）。二ホンイシガメの卵や幼体は、イエネコやカラスに捕食されることもわかってきています。特にイエネコは、日本の絶滅危惧種に対して大きな影響があることも各地で報告されはじめています。捕食生物の中でも特にイエネコのような家庭動物の適正な飼養（屋内飼育など）を徹底する普及活動は、間接的に絶滅危惧種を守ることに大きくつながります。このような具体的な活動だけでなく、私たちのような研究室（<https://www1.gifu-u.ac.jp/~lar/>）、地域で活動されている団体、動物園水族館など、最前線で実働しているところに資金的支援をしていただくことも大きな力になります。また、もっと身近には、地域の生物の現状や、絶滅危機・保全などの活動が行われているという情報を、SNS等で正しく発信していただくこともとても有益です。

【参考文献】

1. 前田佳紀, 楠田哲士, 橋爪涼子, 川村きこ, 吉川晶子, 加古智哉, 安積修平, 古橋美穂, 宮元彩希, 杉浦鉄太. 2020. 岐阜市内で捕獲した淡水生カメ類の四肢及び尾部の欠損状況. 爬虫両棲類学会報2020(1): 1-5.
2. 田上正隆, 高木雅紀, 楠田哲士. 2019. 岐阜県で発見されたアライグマに襲われたと考えられる二ホンイシガメ. 亀楽17: 8-10.
https://kobe-sumasai.jp/wp-content/uploads/2020/10/H31.3.Kiraku17_05.pdf
3. 楠田哲士, 前田佳紀, 原口句美. 2020. アライグマによると思われるミシシippアカミミガメの前肢食害: 屋外人工池での一例. 亀楽20: 1-3.
https://kobe-sumasai.jp/wp-content/uploads/2020/10/R2.8.Kiraku20_01.pdf
4. 楠田哲士. 2019. 二ホンイシガメの生息域外保全に向けた考え方の整理と全国の取り組み事例の紹介. 亀楽17: 10-18.
https://kobe-sumasai.jp/wp-content/uploads/2020/10/H31.3.Kiraku17_06.pdf
5. 楠田哲士, 安積修平, 加古智哉, 宮元彩希, 古橋美穂, 吉川晶子. 2013. 二ホンイシガメの保全池「淡水生物園」の活動. 亀楽6: 4-7.
https://kobe-sumasai.jp/wp-content/uploads/2020/10/H25.12.Kiraku06_03.pdf
6. 楠田哲士, 原口句美, 加古智哉. 2013. ハシトガラスとイエネコによる二ホンイシガメ卵の食害. 亀楽6: 8-10.
https://kobe-sumasai.jp/wp-content/uploads/2020/10/H25.12.Kiraku06_05.pdf
7. 楠田哲士, 野瀬頼末. 2019. 爬虫類に対する侵略的外来種イエネコ（問題提起）と岐阜大学淡水生物園でのカメ類への被害対策事例. 亀楽19: 19-24.
https://kobe-sumasai.jp/wp-content/uploads/2020/10/H31.3.Kiraku17_07rev.pdf

●講演『岐阜県の両生類：その生態と水族館の保全への取り組み』への質問と回答（回答者 田上正隆）

- Q. ヒダ、マホロバ、ハコネの3種は同じような環境に生息しているようですが、繁殖方法はどれも同じようなものなのでしょうか？ また、それらを人工的に再現するのにどのくらいの期間を要したのでしょうか？
- A. 3種とも普通の生息環境は似ていて、同所的に生息している場所も多いです。しかし、ヒダの繁殖場所は溪流の中、マホロバは地下伏流水中、ハコネも地下伏流水中ですが、源流部の地下水脈の中といったように、種ごとに繁殖場所の環境は違っています。長らくマホロバとハコネを同じ環境で飼育してきましたが、マホロバは産卵してもハコネは産卵が見られないので、やはり種ごとに飼育環境をデザインしていかないと、安定した繁殖は望めないようです。繁殖成功までかかった期間はハコネが一番長く、10年以上かかりました。ただ、全力で取り組み始めたのは3年前からなので、平均してどの種も3~5年くらいでしょうか。
- Q. 両生類について：今日のお話では生息環境の変化による影響や保全について焦点があてられていましたが、天敵による（アライグマ？ など）捕食圧は両生類にはどのくらいの影響があるのでしょうか？
- A. 岐阜県内の両生類に対してのアライグマの影響はよくわかっていませんが、他県ではアカカエル類やトウキョウサンショウウオなどは、産卵のために水場に集まった個体が食い殺されてしまい、相当の被害をうけています。生息数が減っている場所では非常に脅威となります。
- Q. 両生類について：保全のために一般市民ができることはどんなことがあるのでしょうか？
- A. 種によってできることは違ってくると思いますが、まずは身近な環境に生息する両生類を把握することが第一歩だと思います。生息していることすら知られぬまま、生息場所や産卵場所が開発によって消えてしまった場所が数多くあると思われるからです。
- Q. 保全活動に協力してもらえらる仕組みづくりとして具体的な構想がありましたらご教授ください。
- A. コロナ禍以前に、向井先生が中心となり「岐阜の淡水生物を守る会（仮称）」というグループを作ろうという話がありました。繁殖場所の造成などは、このような会の参加者に手伝ってもらえるのではないかと期待しております。コロナ禍がおさまれば、いずれ再始動できればよいと思っています。
- Q. 水族館の展示で注目してほしいポイントなどがありましたら教えていただくと嬉しいです。
- A. 「どの展示生物も黒っぽくて地味」とよく言われてしまう当館ですが、とても美しい婚姻色が見られたり、繁殖させた若い個体を展示に追加したりと、同じ水槽でも季節ごとにいろいろな変化があります。まずはお気に入りの水槽、展示生物を見つけて、季節ごとに見比べてもらえると、いろいろな発見があって楽しんでいただけるのではないかと思います。
- Q. 岐阜県の両生類について、啓発活動の一環として生物と触れ合う機会や普段展示に出さない生物の展示を行うと思うのですが、生物のストレス管理や人前に強くさらされることへの影響に対してどのように対策されているか教えてください。
- A. まず両生類では、お客様が触れるような展示やイベントは行いません。また、基本的には当館の飼育環境に慣れておらず、餌付いていないような個体は展示しません。展示の際もできる限り、身を隠せる場所を準備しています。神経質な種や個体を特別水槽などで展示する場合はアクリルを2重にするなど、できる限りの配慮を行っています。
- Q. 将来アクアトトに就きたいのですが、やはり門はせまいですか？
- A. 基本的に欠員がでないとなかなか募集は出ません。採用情報はHPに掲載されますので、定期的にチェックしていただければと思います。

●岐阜大学の学生によるサークル活動の紹介への質問と回答 (回答者 G-amet・中藤駿)

Q. サークル発足のきっかけ、いきさつ(教員がどの程度サークル活動の支援を行っているのかについて)学生主体ですべて行っているのか？

A. 発足のきっかけは、共通教育講義の1つである「環境マネジメントと環境経営」で環境問題に興味を持つ学生が集まり繋がったことです。岐阜大学は「環境ユニバーシティ宣言」をしていますが、学生が大学の環境活動に参画する機会が限られていたこと、学生の環境意識があまり高くなかったことなどが背景にありました。活動はすべて学生主体で行なっていますが、大学教職員や学外の専門家などのご協力をいただいている機会も多くあります。資料や機材の提供、専門分野の知見の提供のみならず、G-ametが行うイベントに講師や参加者として関わってくださる機会もあります。

Q. バンが池の東側は、コンクリートのブロックみたいなものですが、植物の生育できる提にする計画はありますか。(昔、見ただけで現在は知らないが)この問題は国交省の河川の係に関わる(伊自良川の堤防だから)はずで、国交省との話し合いが必要なのですが。どのような堤防が今後、望まれるか？理想を考えるチャンスと思いましたので。

A. 具体案は決まっておりますが、隣接する伊自良川との水や生物の繋がりが確保された堤防である必要があると考えています。当初は植物の生育できる場所を造成する案がありました。しかし、岐阜市内で絶滅の危険性が高まっている「トウカイヨシノボリ」の繁殖場所や隠れ家として護岸のコンクリートブロックが利用されている可能性が明らかになってきました。現在の環境も必ずしも悪いとは言いつけられないかもしれませんが、堤防は地域住民の鳥類観察での利用や防災面でも注目されていますので、多様な利害関係者との意見交換が理想的であると考えています。

●その他の質問と回答 (回答者 向井貴彦)

Q. 遺伝的背景の研究の事例がありましたら教えてください。

A. 小型サンショウウオの保全については、世界淡水魚園水族館と岐阜高校自然科学部、大垣北高校自然科学部、岐阜大学地域科学部の向井研究室などと共同で、県内の地域ごととの遺伝的な違いを解析しながら保全を進めています。

Q. 外来種が増え、在来種が減ってしまうのがどうして問題となるのか、弱い種が減っていくことは、自然の中で普通なことではないのか。

A. 外来種とは、その生物が自然に移動できる範囲を超えて人が持ち運んだ生物のことです。つまり、外来種問題は人が原因であり、自然現象ではないからです。

Q. 図書館企画展を見させていただきました。そこに、二ホンオオカミの話が出てきました。狼信仰など。残念ながら県内には正式な記録がないそうですが、まだ国内に二ホンオオカミは生き残っていると思いますか？ また秩父地方や奥多摩の山では比較的最近の目撃例やそれらしき写真などがネットにアップされていますが、あれは一体何なのでしょう。ただの野犬なのでしょう？ また、日本のどこかで生存している可能性はどれくらいあるのでしょうか？

A. 野生のオオカミが個体群を維持するためには、ほんの数頭では無理だと考えられます。すでに100年以上にわたって「オオカミっぽい」動物が散発的に目撃されているだけなので、二ホンオオカミが生き残っているというよりは、野犬などの可能性が高いように思われます。

Q. トンボの専門として活動しています。レッドリスト種の生息地においても、そういった種類がいることは地域の人が知らないことが多くあります。地域として保全活動につなげるポイント等・アドバイスいただけませんか？

A. 希少種の乱獲の心配がないならば、仲間を集めて団体を立ち上げて、観察会などを定期的に行うというのが良いように思います。

Q. 動植物含めて、外来種だけです。「持ちこむな」という看板があっても放す人がいるようです。どうしたらよいでしょうか。

A. ゴミを捨てるなど書いてあるのに不法投棄が無くならないように、どうしようもないことなのかもしれません。外来種が問題であることを地道に啓発するしかないように思います。

Q. 外来種が今、とてもたくさん生息してしまっている状況にあると思います。そんな中、外来種は在来種を守るためといって罪のない生物たちが殺されていると思います。外来種を殺さずに在来種を外来種から守る方法はあるのでしょうか。

A. 質問された方は特定の外来種を想定して、駆除させたくない、と思っておられるのではないのでしょうか。その場合は、議論の対象を「外来種」とするのではなく、自分が議論したい種を明確にして、その種(アカミミガメとか?)を殺さずに済む対策を議論するほうが建設的ではないかと思えます。

※外来種問題について追記

日本に持ち込まれる外来種は何千種もいて、その多くは昆虫や植物です。そのほとんどは何の対策もされておらず、外来種だというだけで駆除されているわけではありません。また、駆除などの対策が行われている外来種にはヒアリやセアカゴケグモ、さまざまな農林業の害虫なども含まれます。そうした外来昆虫や外来雑草などを「殺さずに対策」というのは現実的に無理でしょう。上の質問をされた方も、そうした外来種について殺さずにおきたいというわけではないと思います。つまり、外来種問題の全体的な方向性として「侵入予防と駆除などの対策」があるとしても、現実的には外来種ごとに影響の大きさなどを考えて、影響の大きな種(あるいは侵入した場合に影響が大きいと予測される種)について個別に対策が行われています。